

て、養ひ置くと傳へ聞き、「具して參れ」と御使立つ。その頃靡かぬ草木も無し。聽て具してぞ參りける。別府立出でつく／＼見て、「これは興がる生物かな。人かと思れば人にも無し、鬼かと思れば鬼にも無し。唯餓鬼とやらんはこれかとよ。我に暫く預けよ。都へ具して上り、物笑ひの種となさん」とて、門脇の翁に預け、やがて扶持をぞ加へける。かの門脇の翁と申すは、大臣殿の御内に、年頃召仕はれし者なれども、何時ぞの程に引き代へて、御背も小さく色黒く、瘡せ衰へさせ給ふ。在りしに變る御風情をば、いかでか見知り申すべき。されども情深き夫婦にて、「あら無慙と瘡せ衰へたる餓鬼や」とて、別して扶持をぞ加へける。或夜の寢覺めに、祖父が祖母に語りけるは、「やあ如何に祖母御前、先祖の君大臣殿、蒙國の討手に御向きあつて、未だも見えさせ給はねば、その思ひのみ深うして、漫に年も寄るぞとよ。扱も御臺所は國府の廳屋に坐すよな」。祖母この由を聞くよりも、「さればこそとよその事よ。別府殿のお御臺へ心を懸け給ひ、御玉章のありしかども、更に靡かせ給はねば、無念至極に思召し、この四五日が先程に、まんわうが池に生きながら、柴漬け申しぬると聞く。これにつけても憂き命、強顔く今に長らへ、斯かる事をも聞くや」とて、堰き敢へずこそ泣きにけれ。その後祖父が聲として、「やあ如何に祖母御前、思ふ仔細の候に、今より後は、忌々しうな泣いそ」

とぞ言ひたりける。祖母この由を聞くよりも、「あはれ實に、世の中に心強きは男子なり。祖父がやうなる強顔しこそ、主の別れも悲しまね。我等昔の御情、只今のやうに思ふ」とて、又さめ／＼と泣きにけり。祖父聞いて、「あら優しの祖母御前や。さ程に君を大事に思ひ申さば、物語りして聞かすべし。構へて祖母御前口ばしきくな。それを如何にと申すに、別府殿の後見の忠太は、翁が甥にてある間、御臺所の柴漬けられさせ給はん事を、祖父が豫て承り、如何はせんと思ひ、我等が愛子の一人姫、御臺と御同年に參り合ふ、『御命に替るべきか』と尋ねてあれば、姫は斜に喜うで、『男子女子には限るまじい。御主の命に替らんこそ、望みにて候へ忍びやかに』と申す程に、祖父餘りの嬉しさに、御臺所と號し、まんわうが池に沈め、姫が居たる帳臺に、御臺を隠し申したり。形見はこれにあるぞ」とて、數の形見を取出して、祖母が手にこそ渡しけれ。祖母は形見を取持ちて、「これは夢かや現かや。君を助け申すこそ、歎きの中の喜びなれ。然りとは申せども、人間に限らず生を享けたる類の、子を思はぬは無きものを、三界一の獨尊釋迦牟尼如來だにも、御子の羅喉羅尊者をば、又みつけりと説き給ふ。こしつてう(16)は子を悲しみ、修羅の腦にこの角を立つる。夜の鶴は子を悲しみ、連理の枝に宿らず。野牛子牛を舐り、野外の牀に臥すと聞く。生きとし生き生を享けぬる類の、子を思はぬは無き

ものを、我が身を分けし一人姫、主の命に替へし事、恨みとは更に思はねど、あら惜しの姫や」として、流涕焦れ歎きければ、祖父も共に泣く時ぞ、大臣殿は聞召し、共につれて忍び音の、堰き止め難き御涙、やる方無うぞおはします。只今も立出で、これこそ古の百合大臣と、名告つて聞かせ夫婦の者に、喜ばせばやと思召すが、暫しと思ふ所存にて、時節を待たせ給ふ。

既にその年打過ぎ、新玉月になりければ、筑紫の在廳馳せ集まり、弓のたうを始め、別府殿を祝ふ。さる間、別府世に有り顔なる風情にて、痛はしや大臣殿には、御顔にも御足手にも、さながら苔の蒸し給へば、苔丸と名づけ、矢取の役にぞさしにける。大臣殿は弓場に立出で給ひ、此處にて運を試さばやと思召し、「爰なる殿の押手の顫ふは、下手げなり」と散々に悪口し給ふ。別府聞いて、「やあ何時汝が弓を射習ひて、さかしらを仕るぞ。もどかしくば一矢射よ」

「射たる事は候はねども、餘りに人々の、射させ給へる御姿の醜き程に申して候」「それ程汝が射ぬ弓を、さかしらを仕るか。只今弓を射じと申さば、宇佐八幡も御知見あれ、某が手に懸け直に斬つて棄つべし。疾つく射よ」と責めかくる。「御説の重く候程に、一矢射たくは候へども、但し引くべき弓が候はず」「やさしく申す者かな。強き弓の所望か、弱き弓の所望か」「同じくば強き弓の所望にて候」「易き程の事」とて、筑紫に聞ゆる強弓を、十張揃へ参らせければ、二

三張を押し竝べ、はらくと引き折つて、「何れも弓が弱くして事を缺きぬ」と仰せけり。別府これを見て、「彼奴は曲者かな。所詮古大臣の遊ばしたる、鐵の弓箭を射させて見よ」「尤も然るべき」とて、忝くも宇

佐八幡の御寶殿に籠め奉る、鐵の弓矢を申し下して、大臣殿に奉る。何時しか元よりの御手執、かゝりの松に押當て、ゆらりと張つて素引し、鐵の御てうづ(け)を打番はせ給ひ、的には御目を懸けられず、別府の大夫に御目を懸け、大音揚げて



舞の本板本挿繪

仰せけるは、「如何にや九國の在廳よ、我をば誰と思ふぞ。古島に棄てられし百合若大臣が、今春草と萌え出づる。道理に任せて我や見ん、非道に任せて別府や見ん、如何に」とありしか

ば、大友諸卿・松浦黨、一度にはらりと畏まり、君に従ひ奉る。別府も走り下り、「降参なり」と手を合はする。いかでか許し給ふべき。松浦黨に仰せ付け、高手小手に縛め、かゝりの松に結び付け、自身立出で給ひて、「汝の舌の嚙りにて、我に物を思はせたる、因果の程を見せん」とて、口の内へ御手を入れ、舌を掴んで引抜いて、彼處へがばと投げ棄て、頸をば七日七夜に引首にこそせられけれ。上下萬民これを見て、「辛く當りたる者の果てを見よや」とて、惡まぬ者は無かりけり。弟の別府のしんを、同じ如く罪科あるべかりつれども、島にて申せし情の言を、ありの儘に申せば、「さらば汝を助くる」とて、いきの浦へぞ流されける。その後大臣殿、國府の廳屋に移らせ給ふ。御臺この由を聞召され、偏に夢の心地して、袂を顔に當てながら、涙と共に出で給ふ。逢はぬが先の涙は、理なれば道理なり。逢うての今の嬉しさに、言の葉も絶えて無かりけり。何の辛さに我が涙、押ふる袂に餘るらん。

その後宇佐の宮の御宿願の由、御物語あれば、大臣斜に思召し、立てさせ給ふ大願は、事の數にて數ならず、金銀珠玉を悉く鏤め給ひける間、有難しともなかく、申すに及ばざりけり。その後、いきの浦の釣人に、「尋ぬべき仔細あり、急ぎ參れ」と御使立つ。いき浦の釣人は、如何なる憂き目に逢ふべきと、只鬼にかみとる風情して、國府の廳屋に參り、庭上に畏まる。

大臣立出で給ひて、「あら珍しの舟人や。命の主にてある者が、何しに恐れを申すぞ、それへそれへ」と仰せあり。「嬉しきをも辛きをも、などかは感ぜざるべき」と、御杯にさし添へて、壹岐と對馬兩國を、漁人に下し賜ひにけり。門脇の翁を召出させ給ひて、筑紫九箇國の總政所賜ひ給ふ。翁が姫の爲に、まんわうが池の邊に御寺を建て給ひて、一萬町の寺領を寄せさせ給ひけるとかや。縁丸が孝養に、都の乾に神護寺と申す御寺を建て給ひけり。鷹の爲に立ちたれば、扱こそ今の世迄も高尾山とは申すなり。大臣殿の御説には、「筑紫に住居をするならば、物憂き事もありなん」と御臺所を引具して、都へ上り給ひけり。網代の輿は十二挺、張輿は百餘挺、大友諸卿・松浦黨、御供を申さる。昨日迄は賤しくも、苔丸と言はれ給ひしが、今日は何時しか引替へて、七千餘騎を引具して都へ上り、父母に對面ありて後、廳て參内申さる。帝叔覽坐して、「如何に珍し、先度別府が上り、討たれぬる由申せしを、眞ぞと思ひて、勅使を下すことも無し。不思議の命長らへ、二度參内する事、一眼の龜の邂逅に、浮木に逢ふが如く」とて、日本國の將軍に、なさせ給ふぞ有難き。扱こそ天下泰平に、國土安穩壽命長遠なりとかや。

(幸若舞曲、百合草若大臣)

註 (1) 神話篇、蛭兒及び三柱の貴御子參照。(2) 神話篇、肥河上參照。(3) 諸鳥か。(4) 未詳。(5) 香取に掛け

である。(6)手初めの意。陳吳は陳勝と吳廣。支那秦朝に叛いて、最初に兵を挙げた人々。(7)俚諺。(8)漢書蘇武傳・蒙求中「蘇武持節」等に見える。(9)鷹の尾羽の名どころ。(10)誦經しながら廊下を歩くこと。(11)未詳。(12)未詳。(13)未詳。或は海底で大日の梵字が海に浮んだといふ傳説(舞曲、日本記)を云ふか。(14)法華經卷八、觀世音菩薩普門品第二十五の句。(15)面白い。(16)未詳。(17)調度。貴人の持つ矢の特稱の由、貞丈雜記に見える。(18)如三一眼之龜値ニ 浮木之孔一(法華經卷八、妙莊嚴王本事品第二十七)

【解説】

百合若傳説である。幸若舞曲としても異色ある題材の一である。

史實的の根據は殆ど無く、空想的色彩が濃厚である。唯、應永二十六年六月蒙古の對馬襲來を撃退した事實は有り(看聞御記)、九州探題の注進狀(同書八月十二日の條)の内容は、頗る靈驗的な傳説的興趣に富んでゐて、この物語の發端を成す蒙古との合戰の面影——同時に本曲の同條の文は太平記卷三十九「自ニ大元一攻ニ日本一事」の記述にも學んでゐると思はれる——がある。(且、本曲の百合若の父左大臣公みつが、滋野井家の藤原公光の名を借りたのであつたら、

愈々この外寇と本舞曲との關係が密接となる。公光は恰も應永二十七年閏正月内大臣、十二月右大臣に任じ、三十年十月薨じた人で、この曲の成つたのも、二十七年閏正月或は恐らく三十年十月以後であらう)文永・弘安の外寇以來の反動精神は、倭寇と共に文學にも反映して、本傳説の他「八劍」「御崎」「異國退治」等の謡曲を生んでゐる。御伽草子御曹子島渡りにも「むくり退治」の語が見える(英雄譚、巡島説話、義經島巡り参照)。機章記には伊豫の領主百里の孫益郎



像ズイシリユ

が蒙古の賊魁を射殺した傳説を載せ、又本傳説と類似の口碑が壹岐・豊後地方に見出され、甲賀三郎傳説とも密接な交渉を有してゐる。又謡曲阿黒王では田村鷹の鬼神退治傳説と結合してゐる(英雄譚、鬼神退治、鈴鹿御前参照)。

本傳説があまりに荒唐なものと、その輪廓と百合若の名とが有名な希臘神話のオデッシウス(Odysseus)即ちユリシイズ(Ulysses)の物語に似てゐる事を指摘して、ホーマーのオデッセイ(Odyssey)がその本據であらうとは坪内逍遙博士の推斷である。直接ホーマーからの翻案としてしまふことは或は問題であらうが、説

話の形式は明らかにペネロピー型 (Penelope type) 長年月の夫の外征中孤閨を守つて貞節を全うし、終にめでたく夫妻再會する型。ペネロピー (ペネローペ) はオディッツイウスの妻) で、百合若が苔むした姿で城内に入り、衆人の面前で昔百合若の用ゐた大鐵弓を引いて諸侯を壓服する事までオディッツイと全く一致する。若し本傳説の主部がユリシイズ物語からの轉化だつたのなら、御伽草子天狗内裏の牛若丸地獄極樂廻り説話の本據が、この希臘叙事詩と並稱せられ得る羅馬叙事詩イニード (Aeneid) と目せられ得るのと好對照をなすといふべきである。

この傳説には動物報恩のモチーフと、身替説話の乙種型を含んでゐる。後者は仲光傳説 (英雄譚、美女丸解説参照) と共に同型説話の先驅者となり、前者は近松の百合若大臣野守鏡 (本傳説と、謡曲野守鏡に既に取材されてゐる野守鏡傳説とを併せたもの) では、子別モチーフの葛の葉型怪婚説話 (後輯、怪異譚、妖怪説話、葛の葉参照) となつてゐる。又、本傳説は民間口碑では種々の古跡等を遺してゐるが、元來は全然關係無き遊離的な巨人傳説と結び付いてゐる場合が多い。

鉢の木

(上略)シテ詞「夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚いて當て參らせ候べき。や、思ひ出したることの候。鉢の木を持ちて候。是を切り火に焚いて當て申し候べし。ワキ詞「實に〱鉢の木の候よ。シテ詞「さん候 某世に在りし時は、鉢の木に好き數多木を集め持ちて候ひしを、斯様の體に罷りなり、いや〱木好きも無用と存じ、皆人に參らせて候。さりながら、今も梅櫻松を持ちて候。あの雪持ちたる木にて候。某が秘藏にて候へども、今夜の御饗應に、是を火に焚き當て申さうするにて候。ワキ詞「いや〱是は思ひも寄らぬ事にて候。御志は有難う候へども、自然又御事世に出で給はん時の御慰みにて候間、中々思ひも寄らず候。シテ詞「いやとてもこの身は埋木の、花咲く〱世に逢はん事、今この身にては逢ひ難し。ツレ謡「唯徒らなる鉢の木を、御身の爲に焚くならば、シテ詞「是ぞ眞に難行の、法の薪と思召せ。ツレ謡「しかもこの程雪降りて、シテ詞「仙人に仕へし雪山の薪。ツレ謡「斯くこそあらめ。シテ謡「我

も身を地誼「捨人の爲の鉢の木、切るとてもよしや惜しからじと、雪打ち拂ひて見れば、面白や如何にせん。先づ冬木より咲き初むる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木より先づ先立てば、梅を切りや初むべき。見じといふ、人こそ憂けれ山里の、折掛垣の梅をだに、情無しと惜しみしに、今更薪に爲すべしと、豫て思ひきや。櫻を見れば春毎に、花少し遅ければ、この木や詫ぶると、心を盡し育てしに、今は我のみ詫びて住む、家櫻切り燻べて、緋櫻になすぞ悲しき。シテ誼「扱松はさしも實に、地誼「枝を撓め葉を透して、風情あれと植ゑ置きし、その甲斐今は嵐吹く、松はもとより煙にて、薪となるも理や。切り燻べて今ぞ御垣守、衛士の焚く火はお爲なり、よく寄りてあたり給へや。

ワキ詞「近頃よき火に當り寒さを忘れて候。シテ詞「御出でにより我等も火に當りて候。ワキ詞「如何に申し候。主の御名字をば、何と申し候ぞ、承りたく候。シテ詞「いや某は名字も無き者にて候。ワキ詞「何と仰せ候とも、常人とは見え給はず候。自然の時の爲にて候。何の苦しう候べき。御名字を承り候べし。シテ詞「この上は何をか包み候べき。是こそ佐野の源左衛門の尉常世が成れる果にて候。ワキ詞「それは何とて斯様の散々の體にはなり給ひて候ぞ。シテ詞「その事にて候。一族共に押領せられて、斯様の身となりて候。ワキ詞「なうそれは何とて鎌倉へ御上り候ひ

て、その御沙汰は候はぬぞ。シテ詞「運の盡くる所は最明寺殿へさへ修行に御出で候上は候。斯様に零落れては候へども、御覽候へ、これに物の具一領雑刀一えだ、又あれに馬をも一疋繋いで持ちて候。是は只今にてもあれ鎌倉に御大事有らば、ちぎれたりともこの具足取つて投げ懸け錆びたりとも雑刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参じ著到に付き、誼扱合戦始まらば、地誼「敵大勢有りととも、敵大勢有りととも、一番に破つて入り、思ふ敵と寄合ひて、死なんこの身の、この儘ならば徒らに、飢に疲れて死なん命、何ぼう無念の事ぞ。ワキ誼「よしや身の、斯くては果てじ只頼め、我世の中に在らん程、又こそ参り候はめ、暇申して出づるなり。シテ、ツレ誼「名残惜しの御事や。始めはつゝむ我が宿の、さも見苦しく候へど、暫しは留まり給へや。ワキ誼「留まる名残のまゝならば、さて幾度か雪の日のシテ、ツレ誼「空さへ寒きこの暮に、ワキ誼「何處に宿を狩衣、シテ、ツレ誼「今日はかり留まり給へや。ワキ誼「名残は宿に留まれども、暇申して、シテ、ツレ誼「御出でか。ワキ誼「さらばよ常世。シテ、ツレ誼「又御入り。地誼「自然鎌倉に、御上りあらばお尋ねあれ。興がるは法師なり。甲斐々々しくはなけれども、公方の縁になり申さん。御沙汰捨てさせ給ふなど、言ひ捨てて出船の、共に名残や惜しむらん、共に名残や惜しむらん。(中人)

後シテ謠「如何にあれなる旅人、詞鎌倉へ勢の上ると云ふは眞か。何夥しく上る。さぞあるらん東八個國の大名小名、思ひくゝの鎌倉入り、さぞ見事にて候らん。白金物打つたる糸毛の具足に、金銀を延べたる太刀刀、飼ひに飼うたる馬に乗り、乗替中間綺羅びやかに、打連れく上る中に、常世が常に變りたる、馬物具や打物の、物そのものにあらざる氣色、諸さぞ笑ふらんさりながら、所存は誰にも劣るまじと、心ばかりは勇めども、勇みかねたる瘦馬の、あら道遅や。地謠「急げども、急げども、弱きに弱き柳の糸の、シテ謠「よれによれたるく瘦馬なれば、地謠「打てどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、乗り力無ければ追ひかけたり。(中略)

ワキ詞「やあ如何にあれなるは佐野の源左衛門の尉常世か。是こそ何時ぞやの大雪に宿借りし修行者よ。見忘れてあるか。いで汝佐野にて申せしよな。今にてもあれ鎌倉に御大事有るならばちぎれたりともその具足取つて投げ懸け、錆びたりともその薙刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参るべき由申しつる、言葉の末を違へずして、参りたるこそ神妙なれ。先づく今度の勢づかひ、全く餘の義に非ず。當世が言葉の末、眞か偽か知らん爲なり。又當参の人々も、訴訟有らば申すべし。理非によつてその沙汰致すべき處なり。先づく沙汰の始には、常世が本領佐野の庄、三十餘郷返し與ふる所なり。又何よりも切なりしは、大雪降つて寒

かりしに、秘藏せし鉢の木を切り、火に焚き當てし志をば、何時の世にかは忘るべき。いでその時の鉢の木は、梅櫻松にてありしよな。その返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、合はせて三箇の庄、子々孫々に至る迄、相違あらざる自筆の狀、謠「安堵に取り添へ賜びけ



鉢の木の後のシテ
小書(附)鎌倉形着け珍しもの

れば、シテ謠「常世はこれを賜はりて、地謠「常世はこれを賜はりて、三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ。始め笑ひし輩も、是程の御氣色、さぞ羨ましからん。扱國々の諸軍勢、皆御暇賜はり、故郷へとぞ歸りける。シテ謠「其中に常世は、地謠「其

中に常世は、喜びの眉を開きつゝ、今こそ勇めこの馬に、打乗りて上野や佐野の舟橋とり離れし、本領に安堵して、歸るぞ嬉しかりける。歸るぞ嬉しかりける。(謠曲、鉢の木)

註 (埋木の花咲くことも無かりしに賞のなるはてぞ悲しかりける (源頼政の辭世、平家物語卷四)

(2)釋尊成道前苦行の故事を指す。(3)池凍東頭風度解、窓梅北面雪封寒(和漢朗詠集卷上、春、立春・藤原篤茂)(4)山里の折掛垣の梅の花如何なる人の見じといふらむ(菅原道真)(5)御垣守衛士の焚く火の夜は燃え盡は消えつゝ物をこそ思へ(詞花集卷七、戀上、大中臣能宣)(6)時頼(7)なほ頼めしめちが原のさしも草われ世の中にあらむ限りは(新古今集卷二十、釋教)この歌清水觀音の御詠と傳へる。(8)面白い。(9)疲勞しきつた。

シテ 常世 ツレ 常世妻 ワキ 時頼

〔附イ〕

(上略)この頃(1)は在りし時頼朝臣の子時宗相模守と云ふぞ、世の中計らふ主なりける。故時頼朝臣は、康元元年(2)に頭おろして後、忍びて諸國を修行し歩きけり。それも國々の有様、人の愁へ(3)など委しく穿鑿り(4)見聞かんの謀にて有りける。賤しの宿に立ち寄りては、その家主が有様を問ひ聞き、理有る愁へなどの埋れたるを聞き開きては、「我は賤しき身なれど、昔宜しき主を持ち奉りし、未だ世にや在すると消息奉らん。持て參でて聞え給へ」など言へば、何條(5)事無き修行者の、何ばかりかはとは思ひながら、言ひ合はせて、その文を持ちて東(6)へ行きて、云々と教へしまゝに言ひて見れば、入道殿の御消息なりけり。「あな

かまく(7)とて、永く愁へ無きやうに計らひつ。佛神などの顯れ給へるかとして、皆額をつきて悦びけり。斯様の事、凡て數知らず有りし程に、國々も心遣ひをのみしけり。最明寺の入道とぞ云ひける。

(増鏡第十一、草まくら)

註 (1)後宇多天皇の朝。(2)後深草天皇の朝。(3)愁訴。(4)探る。(5)何といふ。(6)關東即ち鎌倉。(7)靜かにと制止する語

〔附ロ〕

(上略)西明寺の時頼禪門(1)、密に貌を變して、六十餘州を修行し給ふに、或時攝津國難波の浦に行き到りぬ。鹽波(2)海士の業どもを見給ふに、身を安くしては一日も叶ふまじき理をいよく感じて、既に日暮れければ、荒れたる家の垣間まばらに、軒傾いて時雨も月もさこそ漏るらめと見えたるに(3)立寄つて宿を借り給ひけるに、内より年老いたる尼公一人出でて、「宿を可し奉り貸事は易けれども、藻鹽草(4)ならでは敷物も無く、磯菜(5)より外は可し進物も侍らねば、なか(6)宿を貸し奉りても甲斐無し」と怛びけるを、「さりとは日も早暮れ果てぬ。又可し問里も遠



北條時頼自作木像 鎌倉建長寺藏 寶國

るに(3)立寄つて宿を借り給ひけるに、内より年老いたる尼公一人出でて、「宿を可し奉り貸事は易けれども、藻鹽草(4)ならでは敷物も無く、磯菜(5)より外は可し進物も侍らねば、なか(6)宿を貸し奉りても甲斐無し」と怛びけるを、「さりとは日も早暮れ果てぬ。又可し問里も遠

ければ、枉げて一夜を明し侍らん」と、兎角言ひ詫びて泊りぬ。旅寝の床に秋深^{あきふか}けて、浦風寒くなる儘に、折焚^{せりたくわし}葦の終夜^{よもすがら}、臥^ふ詫びてこそ明しけれ。朝になりぬれば、主^{あるじ}の尼公手づから飯匙^{いひがひ}取る音して、椎の葉折敷きたる上に、餉^{かゝひ}盛りて持出で來たり。甲斐々々しくは見えながら、斯かる業^{わざ}などに馴れたる人も見えねば、覺束^{おぼつか}なく覺えて、「何^{なに}や御内^{みうち}に被^ぬ召^{めい}仕^{つかは}一人は候はぬやらん」と問ひ給へば、尼公泣くく、「さ候へばこそ。我は親の讓^{ゆづり}を得て、この所の一分^{ぶぶん}の領主にて候ひしが、夫にも後れ、子にも別れて、便^{たより}無き身となり果て候ひし後、物領^{ものりやう}（某^{なにがし}と申す者、關東奉公の權威を以て、重代^{むろだいら}相傳^{さうでん}の所帶^{しよたい}を押へ取つて候へども、京鎌倉に參つて可^べ二訴訟申^{しん}一代官も候はねば、この二十餘年貧窮孤獨の身となつて、麻の衣の淺ましく、垣面^{かきも}の柴の屢^{しばしば}も、存^{たも}らふべき心地侍らねば、袖のみ濡るゝ露の身の、消えぬ程とて世を渡る、朝餉^{あさげ}の煙の心細さ、只推量^{おしはか}り給へ」と、委しくこれを語つて、涙にのみぞ咽びける。斗藪^{とさう}の聖^{ひじり}（つくく）とこれを聽きて、あまりに哀れに覺えて、笈の中より小硯取出し、卓^{しよく}の上に立つたりける位牌^{ゐは}の裏に、一首の歌をぞ被^か書^かける。

難波^{なみの}鴻鹽^{しほひ}干に遠き月影の又もとの江に澄まざらめやは

禪門^{ぜんもん}諸國^{しよこく}斗藪^{とさう}畢^はつて、鎌倉に歸り給ふと均^{ひとし}く、この位牌を召出し、押領せし地頭が所帶^{もつ}を沒

收^しして、尼公が本領^{ほんりやう}の上に副へてぞ、これを賜びたりける。この外到る所毎に、人の善惡を尋ね聞きて、委しく注^{しよ}し付けられしかば、善人には賞を與へ、惡者には罰を加へられける事不^レ可^レ勝^あ計^か。されば國には守護・國司、所には地頭・領家^{りやうけ}、有^あ威^{いつて}不^レ驕^{おご}、隱^ひしても僻事^{ひがし}をせず、世歸^よ淳^{じゆん}素^そ（民の家々豊^{ゆたか}也。太平記卷第三十五、北野通夜物語附青砥左衛門が事）

註 (1)北條時頼。(2)西行の「賤が伏屋を葺きぞわづらふ」の句に、江口の尼が「月は漏り雨はたまれと思ふには」と附けた連歌（撰集抄卷四十三）から來てゐる。この連歌傳説は謡曲兩月にも取材せられてゐるが、今鏡（卷八）に見える藤原公教と中務少輔實重との連歌がその原話であらう。(3)總領地頭。數名の地頭の總取締。(4)頭陀、即ち諸國行脚の僧。(5)素材にして作り飾りのないこと。

【解説】

〔附イ〕が最明寺廻國傳説の原形であらう。これを更に具體的な説話として示さうとしてゐるのが〔附ロ〕で、謡曲は他の類似の事件としての鉢の木傳説を素材としたのかとも考へられるが、恐らく〔附ロ〕の口碑に暗示を得てこれを武人常世の事に作り成したのであらう。併し謡曲の流布と共に、國民傳説としては鉢の木のの方が有名で、この影響を受けて近松に最明寺殿

百人上臈があり、北條時頼記の女鉢木、新歌舞伎十八番の雨の鉢の木等の趣向も生れた。更に謡曲藤榮も同じく時頼廻國に關する略種類の事件を題材としてゐるが、これは〔附ロ〕の素材と鉢の木とを併せて作り出したかと思はれるもので、更にそれから出たと思はれる作に浦上といふ謡曲もある。又水戸黄門漫遊傳説は一面最明寺廻國傳説の變形と見る事も可能である。

猶單に説話の型から言へば、鉢木傳説は貧富應報型 (The Rich Man and the Poor type) 乃至、外者款待型、即ち蘇民將來型 (後輯、民俗譚、蘇民將來附福慈と筑波參照) の不完全形とも觀られ得る。素より時頼に關する史的傳説が主態ではあり、又その採つた形式が偶然蘇民將來型に一致したとするが正しいであらうが、この傳説乃至はこの謡曲が形成せられるに當つて、素材として或は作者若しくは傳誦民衆の心持に於て、右の遊離説話が間接に働いてゐなかつた事を保し難い。(〔附ロ〕の原傳説に於ても亦、同じ想像が可能である)

稻村ヶ崎

さる程に〔極樂寺の切通へ被し向たる、大館次郎宗氏、本間に被討て、兵共片瀬・腰越迄引退きぬと聞えければ、新田義貞遣兵二萬餘騎を卒して、二十一日の夜半ばかりに片瀬・腰越を打廻り、極樂寺坂へ打苳み給ふ。明けゆく月に敵の陣を見給へば、北は切通まで山高く路嶮しきに、木戸を構へ垣楯を搔いて、數萬の兵陣を並べて並居たり。南は稻村崎にて沙頭路狭きに、浪打涯まで、逆木を繁く引懸けて、澳四五町が程に大船どもを並べて、矢倉を搔きて、横矢に射せんと構へたり。實にもこの陣の寄手、敵はで引きぬらんも理也と見給ひければ、義貞馬より下り給ひて、兜を脱いで海上を遙々と伏拜み、龍神に向つて、祈誓し給ひけるは、「傳へ承る日本開闢の主、伊勢天照大神は、本地を大日(の尊像に隠し、垂跡を滄海の龍神に顯し給へりと。我が君その苗裔として、逆臣の爲に西海の浪に漂ひ給ふ。義貞今臣たる道を盡さん爲に、斧鉞(を把つて敵陣に臨む。その志偏に王化を輔け奉つて、蒼生(を令レ安となり。仰ぎ願くは

内海外海の龍神八部⁽⁵⁾、臣が忠義を鑑^{かん}みて、潮を萬里の外に退け、道を三軍の陣に令^{ひら}け開給へ」と、至信に祈念し、自ら佩き給へる黄金作の太刀を抜いて海中へ投げ給ひけり。

眞に龍神納受やし給ひけん、その夜の月の入方に、前々更に干る事も無かりける稲村崎、俄に二十餘町干上つて平沙渺々たり。横矢射んと構へぬる數千の兵船も、落行く潮に被^され誘^ほつて、遙の澳に漂へり。不思議と言ふも無^たく類。義貞是を見給ひて、「傳へ聞く後漢の貳師將軍⁽⁶⁾は、城中に水盡き渴に被^せ責ける時、刀を抜いて岩石を刺ししかば、飛泉俄に湧出でき。我が朝の神功皇后は、新羅を攻め給ひし時、自ら干珠を取り海上に擲^なげ給ひしかば、潮水遠く退いて、終に戦に勝つ事を令^え得給ふと。是皆和漢の佳例にして、古今の奇瑞に相似たり。進めや兵共」と被^せ下知^しければ、江田・大館・里見・鳥山・田中・羽河・山名・桃井の人々を始として、越後・上野・武蔵・相模の軍勢共、六萬餘騎を一手に成して、稲村崎の遠干瀉^{とほひ}を、眞一文字に駈け通りて、鎌倉中へ亂れ入る。

(太平記卷第十、稲村ヶ崎成三千瀉一事)

註 (1)新田義貞義兵を挙げ、鎌倉を襲はうとし、先陣大館次郎を差向けたが、北條方大佛貞直の臣本間山城左衛門の血戦に敗死した。(2)大日如來。即ち毘盧遮那佛。これを天照大神の本地とするは所謂兩部神道の説である。(3)をのとまさかり。昔支那で將軍出征の時賜はるを例とした。即ち斧鉞をいふとは、

征伐に向ふ意。(4)人民。(5)八種の鬼神。英雄譚、巡島説話、爲朝島巡りの註(4)を見よ。(6)李廣のこと

貳師將軍拔^{イテ}二佩刀^ヲ一^ヲ、刺^{サンシカ}山飛泉涌出^{キツ}(新撰朗詠集卷下、雜、將軍、前中書王)

【解説】

龍神感應の靈驗譚たる一面、海幸山幸神話(神話篇、滿珠干珠參照)の系統を引く神功皇后征韓の奇瑞傳説の轉化と見るべく、支那説話の李廣の故事も是を助成したであらう事を太平記の文が説明してゐる。歌舞伎に新歌舞伎十八番の義貞太刀流しがある。北條九代名家^{のいさをし}功^{のいさをし}の下の卷で(上の卷が高時天狗舞。後輯、怪異譚、天狗舞參照)、默阿彌の作。明治十七年十一月、猿若座開場式上演の活歴物である。

義貞の勢はあさりを踏みつぶし

昭和八年十月十五日印刷
昭和八年十月二十日發行

國語傳習會前報

定價金三圓八十錢

著者 島津久基

發行者 東京市麻布區笄町一七六番地
八木重良

印刷者 東京市澁谷區猿樂町五一番地
並 河三郎



發行

東京市麻布區笄町一七六番地
東京振替六四九五二番

大岡山書店

池田龜鑑著	伊勢物語に就きての研究 上卷	菊判四五〇頁 定價八圓
橋本佳編	校本夜半の寢覺	菊判四五〇頁 定價三圓五十錢
横山重校 田中市郎衛門	袖中抄 (高松宮本)	四六判三册 近刊
武田祐吉著	國文六國史	新菊三四〇頁 定價二圓五十錢
皇典講究所	校訂延喜式	菊判三册索引附 定價二十圓
池邊眞榛著	校訂古語拾遺新註	菊判七六四頁 定價十圓
栗田寛著	古語拾遺講義 稜威男健	菊判五三〇頁 定價六圓
横山信友重校	高橋氏文考注	四六判二七〇頁 定價二圓五十錢

澤田總清著	懷風藻註釋	四六判四五〇頁 定價三圓二十錢
豐田八十代著	萬葉地理考	四六判附地圖 定價三圓八十錢
栗田寛著 後藤藏四郎註	標註古風土記 常陸	四六判二三四頁 定價二圓三十錢
栗田寛著 後藤藏四郎註	標註古風土記 出雲	四六判三八〇頁 定價三圓二十錢
井上通泰著	播磨風土記新考	菊判七五〇頁 定價七圓五十錢
後藤藏四郎著	出雲國風土記考證	四六判四二四頁 定價三圓二十錢
後藤藏四郎著	肥前國風土記考證	四六判地圖十六 定價二圓三十錢
栗田寛著	古風土記逸文	四六判四〇〇頁 定價三圓五十錢

河野省三著	國學の研究	菊判四七〇頁 定價四圓二十錢
河野省三著	日本精神發達史	新菊三六〇頁 定價二圓八十錢
伊東多三郎著	國學の史的考察	四六判四三〇頁 定價二圓八十錢
野村八良著	上代文學 に現れた 日本精神	四六判二五〇頁 定價二圓
伴信友著 重校	鎮魂傳 附 ミクマノフユ考 ウチツシマ論	四六判二八〇頁 定價二圓五十錢
富士谷成章著 松尾捨治郎校	あゆひ抄	四六判三二〇頁 定價二圓五十錢
山崎美成著 藤田徳太郎校	歌曲考	四六判二五〇頁 定價二圓
彌富破摩雄校 横山重校	伴信友家集	四六判四五〇頁 定價三圓二十錢

橋本増吉著	東洋史上 より見たる 日本上古史研究一	菊判六三〇頁 定價六圓
竹内理三著	奈良朝時代に 於ける 寺院經濟の研究	新菊四五〇頁 定價三圓五十錢
細川龜市著	日本中世寺院法總論	新菊二八〇頁 定價二圓
幸田成友著	日本經濟史研究	菊判九三〇頁 定價十圓
横山由清著 幸田成友校	日本田制史	菊判三七〇頁 定價四圓二十錢
幸田成友著	讀史餘錄	四六判四〇〇頁 定價二圓八十錢
シュタイシエン著 吉田小五郎譯	切支丹大名記	菊判四三〇頁 定價四圓五十錢
吉田小五郎著	聖フランシスコ・シャギエル小傳	四六判三五〇頁 定價二圓五十錢

コルデイニ著	多賀神社編	石上神宮編	高橋健自著	梅原末治著	梅原末治著	長谷部言人著	小金井良精著
日本書志	多賀神社史	石上神宮寶物誌	日本原始繪畫	鑑鏡の研究	銅鐸の研究	先史學研究	人類學研究
四六倍判 定價二十五圓	菊判三五〇頁 定價三圓八十錢	四六倍判圖多 定價七圓	菊判二〇〇頁 定價三圓八十錢	菊判二八八頁 定價六圓五十錢	四六倍判 二冊 定價三十圓	菊判六五〇頁 定價六圓五十錢	菊判六〇〇頁 定價五圓五十錢

折口信夫著	中山太郎著	中山太郎著	柳田國男著	松村武雄著	ペヤリンググールド 今泉忠義譯	永橋卓介譯	永橋卓介譯
古代研究	日本民俗學	日本巫女史	海南小記	民俗學論考	民俗學の話	フレイザー 呪術と宗教	フレイザー 社會制度 の發生と 原始的 信仰
菊判 三冊 定價十九圓	四六判 四冊 定價十二圓四十錢	菊判 八〇〇頁 定價七圓五十錢	四六判 四〇〇頁 定價三圓二十錢	菊判 五〇〇頁 定價五圓二十錢	四六判 二五〇頁 定價一圓八十錢	四六判 二二〇頁 定價一圓八十錢	四六判 三二〇頁 定價二圓五十錢

湯澤幸吉郎著	室町時代の言語研究	菊判四〇〇頁 定價四圓二十錢
湯澤幸吉郎著	解説 日本文法	新菊五八〇頁 定價三圓八十錢
小林靜雄著	能樂史料	四六判三五〇頁 定價二圓八十錢
戸川秋骨著	能樂禮讚	四六判四七五枚 定價三圓二十錢
高橋龍雄著	茶道	四六判四二枚 定價三圓八十錢
高橋龍雄著	茶道名物考	四六判二冊 定價七圓五十錢
佐佐木信綱著	歌集鶯	四六判二〇〇頁 定價一圓七十錢
彌富破摩雄著	歌集青楓集	四六判二二〇頁 定價一圓八十錢

伊藤松久編著	古板俳諧七部集一	冬の日定本	寫眞版三四頁 定價一圓二十錢
伊藤松久編著	古板俳諧七部集二	春の日定本	寫眞版三六頁 定價一圓二十錢
藤井乙久編著	古板俳諧七部集三	曠野定本	寫眞版一九八頁 定價三圓五十錢
藤井乙久編著	古板俳諧七部集四	ひさご定本	寫眞版三二頁 定價一圓二十錢
近刊	古板俳諧七部集五	猿蓑定本	四六判 寫眞版一〇〇頁
近刊	古板俳諧七部集六	炭俵定本	四六判 寫眞版一〇四頁
近刊	古板俳諧七部集七	續猿蓑定本	四六判 寫眞版一三〇頁
藤井乙久著	作者別俳諧七部集		新菊判六〇〇頁 定價三圓八十錢

トI6E-64

そ

横山重校訂	總裁問宮士信	西田宏著	雪山俊夫著	松岡静雄著	豊田八十代著	岩永胖著	横山重校訂	横山重校訂
編修地誌備用典籍解題	ゲルマニア	ニーベルンゲンの歌研究	民俗學上より見たる東歌と防人歌	國文學に現れたる佛教思想の研究	日本文學の方法論	中島廣足全集第二篇	中島廣足全集第一篇	中島廣足全集第一篇
近刊	四六判二〇頁 定價一圓	近刊	四六判四〇〇頁 定價三圓二十錢	四六判二二〇頁 定價一圓五十錢	四六判三二〇頁 定價二圓三十錢	菊判四五〇頁 定價六圓	菊判四二〇頁 定價四圓五十錢	菊判四二〇頁 定價四圓五十錢



